

「子どもの生活の中で育まれる音楽性」 ～子どもになってあそんでみよう!～

講師

平井 恭子 京都教育大学教授

はじめに

京都教育大学から参りました、平井恭子です。私は、岡山県倉敷市の出身で、京都に来てから25年くらいになります。京都教育大学の幼児教育科で、学生の指導をしています。今は、京都教育大学附属幼稚園長も兼任しております。毎日子どもたちと一緒に楽しくうたを歌ったり、虫を追かけたりしながら、忙しいながらも楽しい毎日を過ごしております。

今日は、前半に子どもを取り巻く音環境や音楽的発達に関するお話をさせて頂き、後半は明日からの保育に役立つ音楽遊びを御紹介したいと思いますので、最後までよろしくお願いします。

1. 子どもと大人の聞こえ方の違い

子どもと大人とでは、聞き方、音に対する聞こえ方が、ずいぶん違うということを私たち、保育に携わる者は、まず、知っておくことが大事です。子どもには、どんな小さい音でも周囲の音すべてが聞こえます。最近では、オープンスクールといって、隣のクラスと仕切りが無かったり、天井が高い構造になっていたりするため、音が丸聞こえになる幼稚園も見られます。見た目はお洒落で開放的ですが、音が建物全体に響く環境だと、子どもが落ち着いて生活するにはなかなか厳しい状況なのです。その理由は、先ほど言ったように、子どもが、選択して音を聞くことが苦手だからです。「カクテルパーティー効果」というのですが、パーティー会場のようなざわざわした環境の中でも、自分が聞きたい、集中したい音だけを選択できるのは、大人だけです。子どもには、まだその能力が身についていません。「〇〇ちゃん」と呼んだら、多少ざわざわしていても振り向くことが

できるようになるのが1歳頃で、4歳、5歳くらいから徐々に集中して聞くことができるようになりますと言われています。

2011年に発表された、音の聞こえに関する発達調査によると、高い音は、早い段階で大人と同じくらいの聞こえ方になりますが、低い音や音の強さの変化については、中学生くらいにならないと、大人と同じようには聞こえないと言われています。つまり音の聞こえ方は、私たちの想像以上にゆっくり時間をかけて発達するのだといえます。ですから、小さい子どもに話しかける際は、大人ができるだけゆっくり、はっきりと、子どもに分かるような話し掛け方を心掛けたり、余計な音が入らないような保育室の環境を設えたりする等、気を配る必要があります。最近の研究から、音が聞き取りにくい環境下で毎日過ごしている子どもは、言葉の発達や情緒の安定に支障を来す可能性が高いことが明らかになっています。

2. 保育室の音環境

日本の保育室の音環境は、世界の中でもかなり問題視されています。具体的にはどれくらいのレベルかというと、保育室の構造にもよりますが、一番うるさい時で、地下鉄の車両がゴーゴーと入って来た時と同レベルの音がしている時間帯もあると言われています。そのような環境下では、かすかな音に耳を澄ましたりするのは難しく、音の公害の中で暮らしていることになってしまいますので、ストレスが溜まります。子どもだけでなく、保育者の労働環境としてもあまり良くないということ意識して頂きたいと思います。

わが国では保育室の音の基準が制定されてい

ませんが、欧米のいくつかの国（オーストラリア、ドイツ、英国等）では、従来から基準が設けられています。このような情勢の中、日本でも最近になって保育室を静穏な環境に保つための基準について検討が始まっているようです。

音は、見えない環境ですから、大人が意識的にコントロールしてあげたり、子どもが音に関心をもつように働きかけたりする必要があります。また、大人自身が、音に耳を傾ける態度や音に対する感性を研ぎ澄ますことがとても大切です。園内の環境を準備する時、目に見える部分だけに集中しがちですが、音環境の観点から、居心地の良い音の環境をつくってあげることが、保育者としての責務ではないかと思います。

私たちの身の周りには、今、様々な音があふれています。子どもたちは、生まれた時からYouTubeの音楽、自動車の音、踏切の音等、様々な音を聞いて暮らしています。音というのは、自分で耳をふさいだり、遮断したりしないと、防ぐことができません。勝手に耳に入ってきて来ますので、子どもたちにどういう音の環境を作ってあげるかというのを大人が意識しないと、なかなか、注意して聞くという態度も育ちません。まず、大人が音に対する意識をしっかりとつことが重要だということを普段から感じています。

3. 子どもが音に心動かされる瞬間

実際に子どもは、どんな風に音に耳を傾けているのでしょうか。音に心を動かされる瞬間というのは、どういう場面なのでしょう。そのことを今、関わっている子どもたちの事例から語り合ってみようと思います。

雨の日、保育室の前のテラスで子どもたち(3歳児)が雨の音を聞いている様子を動画で見る。

入園して一か月も経っていない頃、初めて雨が降った日のことです。担任の先生は、地面や水たまりに雨粒が落ちていろんな音がするのを感じてほしいと思い、子どもたちをテラスに呼ぶと、早速何人か集まって来ました。ある子どもは、先生が用意してくれた容器を持って、屋根から落ち

てくる雨を集めようと手を伸ばしました。すると容器に雨だれが「ポツ、ポツ、ポツ…」と当たる音が聞こえて、その瞬間に「はあーっ」と声を出して、そばにいた保育者の方を満面の笑みで振り返ります。

もし、皆さんがその場面に差し掛かったとして、この子どもにどういう風に関わりますか？

【トークセッション】

(平井教授)「皆さんならこの場でどう関わったでしょうか。」

(参加者)「音の違いを聞いて、『いろいろな音があるね。』って声を掛けるだろうと思います。」

(参加者)「『雨の音がしているね。』と言うのと、多分、雨の振動が響いている感じがあるだろうから、『雨を拾えたね。集まったね。』という感じで、お話するかなと思います。」

(平井教授)「耳で聞いて、手を通じてもトントントントンという振動を感じているんじゃないかということですね。」

(参加者)「音自体を、気持ちよく聞いている感じだから、一緒に『いい音ねえ。』と共感します。音に対してその子と感想を言い合うとか、『雨、捕まえられたなあ。』とか、いろいろ話したりするかなあ…。」

雨というのは、それ自体が音をもっているのではなく、何かに当たることで音がしますよね。傘を差している時は、傘に当たる音、身体に当たった時には、肌に当たる触感で感じたりします。先生が置いておいた容器を手にとった子どもが、大粒の雨が降ってくる所に手を差し出すと、雨粒が容器に当たって「ポツ、ポツ」と音がしました。たまたまその時、先生が、隣にいらっしゃったのです。この子が「はあーっ」と振り返った時、先生は特に言葉を掛けなかったのですが、小さい声で「ポツポツポツ…」と音に合わせて声を出してあげて、子どもが振り返った時に、「うーん」と頷いて共感してあげていました。その時の先生のように、(言葉を発していても、いなくても)目と目で共感し合うというのが大事だと思います。

園庭にある小屋(遊具)に入って、小窓から両手を出して石で側面を叩いている子どもの動画を見る。
子ども「タタンタタン…」(石で小屋の側面を叩く音)
保育者「おもしろいね。」
子ども「タタンタタン…」「トントン…」(石を叩く音)「ガチャン」「駅に着いた。」

どうでしょう。わかりましたか？ 始めこの子

は「タタン、タタン…」と、石で小屋を叩いていました。それが、だんだん激しくなって、それから、だんだん、だんだん、ゆっくりになって、「ガチャン」「着いた」と最後に言いました。この子は、ずっと電車に乗っているつもりで表現していたということが、最後の言葉で分かりました。私は最初、この子が何をしているのかよく分からなかったのですが、電車に乗って走ってる気持ちになっていたのだということが、最後に読み取ることができました。

この場面を見た時に『でんしゃはうたう』という絵本を思い出しました。この絵本では、駅を出てから次の駅に着くまで、鉄橋を渡ったり、トンネルに入ったりして音に変化する様子を、全部オノマトペで表現しています。この子は、オノマトペを使っていた訳ではありませんが、石ころで叩いた音で、速い遅い、強い弱いという音のニュアンスを巧みに表現していたと思います。実はこの絵本の著者の三宮麻由子さんは、4歳くらいから病気のため目が見えなくなりました。そのため視覚的に捉えることができませんが、他のいろいろな感覚を駆使して身の回りの変化を感じているのです。例えば肌で風を感じたり、雨の音を感じたりすることで世界を知るということを、4歳くらいからずっと続けていらっしやっていたので、オノマトペで世の中の音を表現するという感性が培われたのかなと思います。リズムカルなオノマトペから一緒に電車の旅をしているような気持ちになれる絵本です。一度、ぜひ読んで頂きたいです。

また、同じ著者の『センス・オブ・何だぁ?』という本は、『センス・オブ・ワンダー』というレイチェル・カーソンの有名な本の題名をもじって書かれた本です。「感じて育つ」という副題が付いていて、世の中のことを音で感じるのは、素敵なことだよ、という著者のメッセージを受け取ることができます。こちらも併せて読んで頂きたいと思います。

感動を分かち合う大人の存在

レイチェル・カーソンは、1907年、ピッツ

バーグで生まれた生物学者です。小さい時にお母さんと自然の中を散策し、生命の神秘に触れるような経験をたくさんして、文学も好きだったものですから、大きくなって生物や環境の研究をしながら、著書もたくさん残していっぱいます。『サイレント・スプリング(沈黙の春)』という本を出して「環境をこのままにしておくと、世界は大変なことになりますよ」と警告し、当時のアメリカ社会に衝撃を与えました。ケネディ大統領も、この本に非常に感銘を受け、「環境のことをもっと真剣に考えていこう」「環境破壊をなんとかしなければいけない」と、法令ができるきっかけにもなりました。

彼女の最後の著書として（書き上げる前に亡くなったのですが）『センス オブ ワンダー』という本があります。その中に「子どもが生まれながらもつている新鮮で豊かな好奇心をいつまでも新鮮に保ち続けるためには、一緒に感動を分かち合う大人がそばにいる必要があります。」と書かれています。先ほど、子どもがたまたま表現したことを、一緒に隣で感じて「ほんとに素敵だね」「いい音だね」と気持ちを分かち合う大人がそばにいることの重要性についてお話しましたが、レイチェル・カーソンも同じことをおっしゃっています。音というのは、見えない環境なのですが、皆さんもこういう感性や気持ちをもって子どもに接すると、ずいぶん、保育の見え方、聞こえ方というのが変わってくると思います。ぜひ、このことを覚えておいて頂きたいなと思います。

生活の中にある音との出会い

幼稚園の生活の中には、たくさんの音との出会いがあります。例えば、水が凍る寒い時期には、池に氷が張ります。冷たい空気の中でパリンと氷が割れる音を聞くと、張り詰めたような特別な感覚がありますね。暑い日は、「どこで鳴いているか」耳を敬ててセミ捕りをする子どもの姿があります。ミンミンゼミなのか、それともアブラゼミなのかというのを聞き分けるような感性もぜひ育てたいものです。また、附属幼稚園には、大きな銀杏の木が園庭の真ん中であって、秋にはたくさ

んのギンナンが落ちます。それを、子どもたちが拾い集め、種子を取り出して乾燥させ、網に入れて子どもたちの前で炒ります。すると香ばしい匂いと共に、殻がパチンパチンと、はじけ、「わあ、花火みたい。」「ポップコーンみたいだ。」と、大喜びする子どもたちの姿があります。

目の前で聴こえた音を自分の生活と結びつけて様々なイメージを広げることも大事です。落ち葉を踏んで歩く音、羽根つきの音、水の音等、生活の中で様々な音を楽しむことを意識して保育しています。冬のオリンピックでフィギュアスケートのシーンが放映された時には、靴の底にペットボトルのキャップを貼り付け、スケート靴を履いたつもりで床の上をコンコン音を立てて歩くのを楽しんだりもしました。

このように、身の回りの音の面白さに気づき、音からいろんなことをイメージしたり、自ら創り出したりする体験を、たくさんさせてあげたいと思います。

4. 人はなぜ歌うのか

「そもそも人は、なぜ歌うの?」「私たちにとって、音楽って何だろう」ということを考えていきたいと思います。

いつから人は歌い始めたのでしょうか。歌ったり、物を叩いたりして音楽を始めたのはいつからでしょうか。音楽というもの、音というものは、物ではないので証拠が残りません。発掘して楽器のようなものが出て来たとしても、「この時代にはきっとこんな歌があったはずだ」と断言することはできません。証拠が見つからない難しいテーマです。音としての証拠は出て来ないので、直接知ることはできませんが、人間のいろいろな能力の中に音楽があるということの不思議さや意味について研究している人はたくさんいます。ダーウィンも「音楽は、生命維持に直接役立っているようには見えない。けれども、それなのになぜ、その能力が人間に備わっているのだろう。」と言っています。ダーウィンのような偉大な研究者でさえ、答えが出せなかった永遠のテーマです。

動物の中には、うたを歌ったり鳴いたりする動物がたくさんいます。小鳥が歌うのは、よくご存じだと思いますが、テナガザルもうたをもっていて、メスとオスが互いに歌い合うということが知られています。これが、人類のうたの起源ではないかということを、京都大学の霊長類研究所の研究員が長年にわたって研究なさっています。あまり聞いたことないかも知れませんが、クジラも何らかの音声的な信号を使って、縄張りを示したりするうたをもっていると言われています。

つまりうたを歌うのは人間だけという訳ではなさそうですが、身近な音楽行動の一つである「歌う」という行動は、私たちが生まれて、いつから、どういう風に始まるのか、そして、私たちが生きていく上で、うたがどういう意味をもっているのかということを改めて考えてみたいと思います。

赤ちゃんとお母さんのコミュニケーション

3 か月の赤ちゃんとお母さんとのやり取りの様子の動画を見ながら、やり取りの中にうたの要素があるのかということを考えてみましょう。親子の間にはコミュニケーションが見られるか、見られるとしたらどういう手段でコミュニケーションを取っているか、また、赤ちゃんは音楽を感じているのか、感じていると思ったとしたら、なぜそれが分かるのか、ということに注目して見てください。後ほど、皆さんに聞いてみたいと思います。

【動画】母親が、仰向けに寝ている赤ちゃんを真上から見つめながら穏やかな声で、童謡の『ぞうさん』を歌いかけている。母親が1番から歌いはじめて、2番にさしかかったとき、赤ちゃんがお母さんの声に自分の声を重ね合わせるように「あーあー」と声を重ねるような反応をしている。

これは、私の子どもで、歌っているのは私です。この動画で、赤ちゃんとお母さんの間にコミュニケーションは見られたでしょうか。赤ちゃんは、コミュニケーションを取ろうとしていたのでしょうか?

【トークセッション】

(参加者)「お母さんのうたに対して、赤ちゃんが笑っているように見えました。」
(平井教授)「1つの大事なポイントを言って頂きました。『笑ってる』ということで、通じ合ってるなと思ったということですね。」
(参加者)「♪ぞーうさん」のところで、「あーあー」と言っていて、歌っているようでした。お母さんの、「♪ぞーうさん、ぞーうさん」に、赤ちゃんが、「あー、あー」って、一緒に歌っているようでした。」
(平井教授)「最初から?」
(参加者)「2回目からでした。」
(平井教授)「2回目から急に、声を重ねるようになってきましたね。」
(平井教授)『『笑う』と『声を重ねる』が出ましたが、他に何か、ありましたか?』
(参加者)「お母さんと、目を合わせている。」
(平井教授)『『目を合わせて』すごく大事なポイントですね。』
『視線を合わせる』『微笑みを交わす』そして、『声を重ねる』という3つの方法でコミュニケーションを取ろうとしていますね。」
「赤ちゃんは、音楽を感じていますかね?」
(参加者)「感じていると思います。」
(平井教授)「どこからそう思いましたか?」
(参加者)「2番の所で、ぞうさんの「ぞ」の時に「あー」って一緒に言ったり、1番を聞いていて、何かを感じている様子が見受けられたりして、日々、お母さんが、よく歌ってくれているのかな、と思いました。」

たくさん、重要なことを言ってくださいました。赤ちゃんと養育者の間に、共感的で同調的なコミュニケーションが成り立っていました。これは『コミュニケーション・ミュージカリティ』と言って、音楽性を通じて他者と通じ合う能力を指し、今では、世界中で認識されています。うたを歌い合う等、他者と音楽活動することは、他者との相互作用を促進するので、養育者（保育者にも）にとっても良いことです。リズムがあって、拍節性があることは、子どもと絆を感じることに繋がります。マロックとトレバーセンという研究者が「歌い合うということは、絆をつくる上ですごく大事だ」という概念を創出しました。

声を重ねる対象の変化

3カ月の赤ちゃんは、この動画のように、お母さんと声を重ね合っていました。8か月ぐらいになると、兄弟姉妹と一緒に暮らしている家族、保育所に行っている場合は、子ども同士で声を重ね合うという風に、声を重ねる対象が変化してく

るということも研究で明らかになっています。

この幼児が1歳8か月の時に、妹が生まれました。その妹とのコミュニケーションにどのような変化があるのか、1年ごとに追ってみたいと思います。

【動画】姉（2歳6か月）と妹（0歳9か月）との対話。お互いに声を出し合っている動画を見る。

この時期は、一人が声を出したら、それに重ねるように、すぐに同じ音を真似して出しています。音声を模倣することでつながろうという様子が見られたと思います。

次は、1年後の様子です。

【動画】姉（3歳6か月）と妹（1歳9か月）の対話。妹が「あ〜あ〜あ〜」と声を出し、妹の発声が終わったら今度は姉が声を出して笑う、というやりとりを数回繰り返している場面を動画で見る。

少しわかりにくかったと思いますが、一人が声を出している時は、相手は黙って聞いていて、「終わったな」と思ったら声を出して笑っています。そして、また次も、声を出したらその時は聞いていて、「終わったな」と思ったら笑うという、そういうルーティンができてきています。相手の音声を黙って聞き、相手が黙った時に自分が声を出すという何となくの約束事ができています。

そして、その1年後の様子です。

【動画】姉（4歳5か月）と妹（2歳8か月）の対話。姉妹で、ブロッコリーにマヨネーズを付けて食べている。まず姉が「チョンチョンチョン」と言ってマヨネーズを付け、「アーム」と言って口に入れると、続いて妹が同じリズムでその言動を模倣する、そして、それを交互に数回繰り返す、という動画を見る。

「チョンチョンチョン」「アーム」という非常に分かり易いパターンをお姉ちゃんが示したら、妹は、お姉ちゃんが言ってる時は黙っていて、その後と同じように模倣して、「チョンチョンチョン、アーム」と言っています。このようなタイミングで二人のラリーがずっと続いていきます。

初めの動画では、声を重ね合って母と絆をつくるといった、コミュニケーションの始まりのような場面が見られたと思います。次の動画では、姉妹の間での偶発的なやり取り（相手が声を出したら、それに声を重ねるような反応）で音声を模倣

してつながろうとする様子が見られます。一年後には、意識的に相手が声を出している時には黙って、自分が声を出す、相手が出す、自分が出す、という、順番が分かるやり取りが見られました。その後、お姉ちゃんが4歳児で妹はもうすぐ3歳という時期になると、繰り返しやすい双方向的なやり取り、音楽的な約束事が、パターンとして形成され、何回もそれを持続することを楽しむという姿ができてきます。今回は、姉妹の例を出しましたが、就学前施設のようにいつも遊んでいる親しい仲間関係の子ども同士においても、音楽的なやり取りでつながろうとする傾向が、見られます。

情動に作用しやすい音楽の性質

先ほどの姉妹の動画は、社会性の育ちと音楽的な行動は非常に関係が深いということを示唆する一つの例です。例えば、1歳2か月頃の子どもの前向きに抱っこしているところに、一人の女性が来て、前向きに抱っこされた子どもと一緒に音楽に合わせて膝屈伸してもらいます。その後、女性が洗濯ばさみを落として「わあ、大変。私、拾えないよー。」と困ったふりをしたとき、この子どもはどんな行動をとるか、という実験があります。その結果9割以上の子どもが、落としたものを「どうぞ」と差し出し、助けてあげます。つまり直前に一緒に同じリズムで動いた仲間同士だと、社会的な絆を築くことができるという結果が出ています。一方、一緒に音楽に合わせて揺れてくれない女性だと、このような行動が起こりません。自分と動きを同期させた相手に対してのみ、共感したり仲間意識をもったりするというのが、1歳2か月の小さな子どもでも見られるという訳です。

保育の中で、みんなで同じ曲に合わせてダンスをしたり、みんなで同じテンポに合わせて歩いたりすることがよくあると思いますが、こうした経験はただ楽しいだけでなく、みんなで同じ動きをすることで「絆をつくる」という目的もあるのではないかと私は感じています。みんなで、体操したりすることは、社会性を培い、絆をつくるために非常に重要なことだと知っておいて頂ける

といいかなと思います。

園生活の様々な場面での音楽

子どもたちは、園生活の様々な場面で、リズムにのるという経験をしています。例えば、お当番さんが、牛乳を二人で一緒に運ぶ時「1、2、1、2」等とリズムカルな言葉を一緒に掛け合っていたり、ニワトリの鳴き声を聞いて「コーケーコー、まーたーねー」と友達同士で声を合わせてニワトリとやり取りをしたりするような姿もあります。

次の動画のように、遊びの中で即興的に子どもが歌い始める場面も、先生方は良く見かけるのではないのでしょうか。

【動画】泥団子を作っている子どもの姿を動画で見る。

泥んこ遊びをしながら、節をつけて、「ダルダルダール…」と歌っています。そうすると、隣にいた男の子も一緒に「ラッラッラー、ラッラッラー…」と歌い始めます。同じうたではないのですが、歌心が伝染し、歌いたい気持ちが芽生えたのかなと思いました。このような断片的な『唱え言葉』は、この時突然現れたのではなく、今までの生活の中で繰り返し耳にしてきた、日本語特有のリズムが根底にあるのではないかと考えられます。例えば、「ダルダルダール、ダルダルダール」というオノマトペは、「♪てるてる坊主、てる坊主」といった日本語独特の言い回しに、少なからず影響されていると考えられます。そういった日本語特有の音響やリズムをたくさん見たり、聴いたりして無意識にため込んできたものが、何かに心が動いた瞬間に出てくるといえると思います。この子どもは、ザラザラした土で作った時に「ダルダルダール」と言っていたのですが、数分前にドロドロした水分の多い土で泥団子を丸めていた時には「ネルネル・・・」に変化していました。

自分の皮膚で感じた感覚が、全部オノマトペに反映されるのだな、と分かりました。子どもは、掌でも、足の裏でも、いろんな感覚を使って感じたことを歌にしていける力がある、本当にすごい感性だなと思います。

仲間意識の深まりと関連する音楽性

次の動画は、とても仲良しの二人の動画です。

【動画】 ごっこ遊びコーナーで同じような長いスカートをはいている2人の女の子に、「きょうだいみたい」という歌が生まれた場面を動画で見る。

「♪○○ちゃんときょうだいみたい。」と言われて、(あら、私のこと? 「きょうだいみたい」って歌になんかして、すごいね。)と考えているのか、そのことを理解するのに少し間が空きます。だけど、「♪□□ちゃんときょうだいみたい。」と返す。すると少し間が空いて、また「♪○○ちゃんときょうだいみたい。」と返します。その後、「♪○○ちゃんときょうだいみたい。」「♪□□ちゃんときょうだいみたい。」と、今度は間が空くことなくずっと心地よい流れでやり取りが続きます。うたを歌う時、変な間が空いたりすると、音楽の流れが悪くなって心地よくないと思いますが、子どもでも、大人と同じ感覚をもっているのです。「この子と仲良くしたいな」と思うと、間を空けずに、タイミングよく入って行くということが自然にできています。

仲間意識の深まりと音楽性の芽生えというのは、すごく深く関連していると感じさせる事例でした。規則性ができることで、快の感覚をより感じることができて、何回も繰り返すことで、遊びとしての楽しさがもっと深まって行く、ということが考えられると思います。

良く知っているうたが仲間関係へ及ぼす影響

それでは、お互いによく知っているうたというのは、子どもの仲間関係にどのような影響を与えるのでしょうか。事例で、紹介したいと思います。附属幼稚園に新しい先生がやって来ました。ついこの間まで学生で、初めて先生になって5日目です。子どもたちは、興味津々で、新人の先生を取り囲んでいます。遊具の下のととても狭い空間に、ひしめくように集まって、何かいろいろ話している場面です。みんなが「ねえ、この歌知ってる?」と、一度に何人も同時になげかけてくるので、先生も「千手観音じゃないねん、先生は…。みんな、一人ずつ言ってみて。」と困り顔です。その時、あ

る子どもが「じゃあ、これは?」と言って、みんなの知っている「♪ありがとうの花」を歌い始めました。

【動画】 遊具の下でたくさんの子どもが「♪ありがとうの花」を歌って先生に聞かせている場面を動画で見る。

先生はこのうたを知らなかったのですが、子どもたちの間で共有できるうたがあると、気持ちがぱっと一つになり、つながることができる、そんなうたがもつ力を感じることができました。

また、附属幼稚園には園歌があり、始業式等いろいろな儀式の時に必ず園歌を歌います。それは、「♪白いエプロンいっぱい、桜の花びらひいらひら、やさしく育て附属の子…」という歌詞です。4月の初め頃、その歌がブランコの方から聞こえてきました。

【動画】 ブランコを漕ぎながら、♪園歌を二人で歌っている場面を動画で見る。

短いフレーズに区切って、二人で、少しずつ、分担しながら歌っています。一人で歌うのではなく、二人で揃えて歌うのでもなく、新しい歌い方を開発して楽しんでいるというシーンです。この時、子どもたちは、うたをととても細かく分けて歌っていました。何でかなと思ってよく見てみたら、フレーズの切れ目が、ブランコの揺れ1回分にぴったり合っていたのです。子どもたちの中では、自分の体が動くということが、音楽のフレーズを決めることに、すごく大事なんだなということが、この事例でわかります。体で感じる動きのリズムが歌い方を決める基準になっているのだということが、わかります。

声を合わせると楽しいという体験が仲間と合わせて歌う必然性を生み、クラスで歌う時にはない新しい歌い方を、遊びの中で用いるのだと分かりました。子どもが遊びの中でうたを歌う様子を見ると、一緒に歌うと、安心感があったり一体感を感じたりしていることがよく分かります。また、より面白く歌うにはどうしたらいいか、ということ、アイディアを出し合って何度も試したりする姿も見られました。正に、今、よく言われてい

る「学びに向かう力」が、子どもたちが共に歌い合う場面にもしっかりと出て来ていると感じた1シーンでした。

最後に

改めて、「人はなぜ歌うのか」ということを考えてみます。民族音楽学者の小泉文夫さんが『音楽の根源にあるもの』という本の中で言っておられることなのですが、カリブーという鹿の仲間みないな生き物を主食とするエスキモーと、鯨を捕獲して食べるエスキモーと、エスキモーに2種類あるのだけれど、カリブーを捕らえて食べるエスキモーにはみんなで歌ううたが無いのだそうです。けれども、捕鯨するエスキモーは、音楽的に優れていてリズムカルなうたをみんなで揃えて歌う文化があるそうです。つまり、一人でも捕まえられるカリブーと、みんなで力を合わせないと捕まえられない鯨、その違いが、音楽をもつかどうかということに、とても大きく影響している、と言っておられます。人間は生きるために、拍子を揃えて歌うのであって、拍子を揃える必要がなければ(拍子を揃えなくても生きて行けるのなら)、そんな余計なことをやらないんですよと、小泉先生はおっしゃっています。

ただ楽しいから歌っているという訳では無く、子どもたちにとって、絆を築いたり、人と一緒に何かするという根源的な感覚を培う上で、歌ったり音楽をしたりするのは、すごく大事なのだということ、知っておいて頂きたいと思います。音楽的な活動を通じて、育っていることは何かと考え、遊びと音楽の関係を捉え直すことは、とても必要なことです。自発的な遊びの中で、子どもたちが無意識に獲得している能力がたくさんあると考えられますが、未だに解明されていない点も多いです。これらを丁寧に見取って、小学校以上の生活にもつなぎ、伝えていくことが大変重要だと、私は考えています。

以上で、私のお話は終わります。御清聴ありがとうございました。

＊この後は、実際に音楽に合わせて体を動かす等の実技を行いました。

令和7年度第7回共同機構研修会

令和7年9月19日

於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館

《引用・参考文献》

三宮麻由子 文/みねおみつ 絵：「でんしゃはうたう」福音館書店、2009.

三宮麻由子：「センス・オブ・何だぁ？」福音館書店、2022.

レイチェル・カーソン：「サイレント・スプリング(沈黙の春)」新潮社、2001.

小泉文夫：「音楽の根源にあるもの」平凡社ライブラリー、1994.